

院生ボランティア活動記

ICCEES 幕張世界大会のボランティアに参加して

木原 槇子

昨年 8 月に開催された ICCEES 世界大会に、私はボランティアとして参加させていただいた。これほど規模の大きな国際会議に参加したことはこれまでになく、研究室の先生方がこの大会に向けて準備されている様子を身近で拝見していて、ボランティアとして少しでも大会運営にかかわってみたい、国際大会の雰囲気味わってみたいという思いがあった。

連日猛暑の中、世界各地から研究者が続々と会場へやって来た。私は受付担当で、はるばる日本へこの大会のために訪れたスラヴィストたちを最初にお迎えする仕事だった。大会の共通言語は英語とロシア語。私はポーランド文化を専攻していたので、これまで参加した国際会議や大学訪問などでは、いつもポーランド語が共通言語であった。初めて、慣れない英語で対応することとなり非常に緊張し、暑さもあまり感じなかった。一度、ポーランド人の研究者を迎えた時には天にも昇る心地だった。

大規模な会議であるからこそ、スラヴ人とかかわりが強いものの、なかなか聞く機会がないような研究、例えばタタール人文化の研究者による発表が聞けたり、普段教わっている大学の先生

と海外の研究者との議論が聞けたりと、新しい貴重な経験や発見があった。面白そうなパネルだと思い行ってみると、みなロシア語発表でどきりとすることもあった。

毎晩特別企画も催され、終日盛りだくさんのプログラムでへとへとになったが、ボランティアを通じて研究者の世界を垣間見ることができ、新鮮で大きな刺激となった。



大会前日のミーティング

ICCEES、アツい！！

五月女 颯

年が明けた今、まず思い出すのは、とにかく暑かったなあ、ということ。それは参加者の熱気によるのは言うまでもなく、会期中の気温がその前後に比べても高かった（観測データにも表れていて、大会が終わるとすぐに涼しくなって言葉を失う）ということもあるが、その暑さにも負けず連日多数の参加者が会場を満たしていたのである。熱意に溢れた発表を見聞きしつつ我々

ボランティアもまた、微力ながら大会運営に力添えできて嬉しく思う。

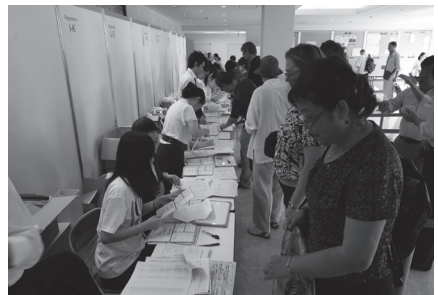
そうした中、ただ冷房のみが酷暑に根をあげ、部屋を冷やす作業を途中であきらめていた。私のいた班は各教室を巡回しトラブルに対応する役を担っていて、大会が始まるまでは機器操作や会場の案内が主な仕事になるかと思っていた。だが実際には冷房の故障した部屋からの会場変更が、5日間で一番混乱し大変な作業となったのだった（特に最高気温 38 度だった日には軒並み壊れた！）。

発表は英語が主だったが、事情に応じてロシア語もまた使われており、個人的に両言語ともがんならなきゃなあ、と感じた。ということはさておき、最終日のパーティーで急遽、グルジアからの研究者を花火大会に、さらに翌日は浅草へと案内するという話になった（浅草ではシーシキンと、松里先生に遭遇）。グルジア人が客好きなのは自認するところであり、私もまたそれに倣ったのである。その後も彼女たちとは連絡を取り、気にかけていただいている。こうした厚い人的な交流が、私がこの学会で得た最大の成果だと思っている。

アンドレイ・クルコフ氏との出会い

豊田 宏

夏、灼熱の幕張で行われた ICCEES 世界大会にボランティアとして参加した中で最も印象に残っているのが、ウクライナ在住のロシア語作家アンドレイ・クルコフ氏との出会いだ。クルコフ氏の名前は学部生の頃から知っていた。代表作の『ペンギンの憂鬱』を読んでいたのだ。売れない小説家と憂鬱症のペンギンの物語。作品に通底する物哀しい雰囲気、孤独なペンギンのミーシャが絶妙なユーモアを与えていた… その作



登録受付デスク。

者が来日することを知り、静かな興奮を覚えた。それと同時に、複雑な状況にあるウクライナからの来日が叶うだろうかという思いもあった。そのため「スラヴ文学は国境を越えて」でクルコフ氏を含む世界的な作家たちが議論する様子を目撃できたことは一生の思い出となった。シンポジウムの後、食堂でパーティーを楽しんでいると、なんとクルコフ氏が先生方のテーブルにいるではないか！ 話しかけようと思ったが、私は人見知りである。なかなか勇気を出せずにいると、クルコフ氏が席を立った。今がチャンスとばかりに、ビールを飲み干して歩み寄り、拙いロシア語で挨拶をした。「『ペンギン』を読みました！」と。するとクルコフ氏は流暢な日本語で挨拶を返し、私が差し出した『ウクライナ日記』にペンギンのイラストを添えた署名をして下さった。自分のミーハー精神に赤面する思いだが、スラヴ文学のおかげで、私は国境を越えることができた。夏の幕張での特別な出会いに感謝したい。

「自己発見・自己探求」の経験

ソルホディーニー・ヤーサマン

イランのテヘラン大学で、「日本語・日本文学」を専攻、卒業し学士号（文学）を取得し、ソルホディーニー・ヤーサマンです。

2012年10月から1年間、文部科学省の支援事業による日本語・日本文化研修生として、東京芸芸大学で勉強した経験もあります。そして、2015年4月より、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部へ大学院研究生として、また日本で研究を続けることができました。

第9回国際中央・東欧研究協議会幕張世界大会 ICCEES を一言で表すと「自己発見・自己探求」の経験だったのではないかと思います。2015年8月、ICCEES 幕張世界大会の準備・運営にかかわった経験や様々な経験を通じ、得たものも多く、同時に今後の向かっていく目標について思い悩むことも多くあり、「自分とは何か？自分の生き方とは何だろう？」という問いに向き合う一週間でしたが、最終的にまた新たなステップを見出し、前進していくという目標を手にすることができました。そんな自己探求の旅の途中、支えて下さったたくさんの方々への感謝を忘れず、いただいた励ましを胸に、これからも一步一步の歩幅は狭くも日々前進していきたいと思っています。ICCEES にボランティアとして参加して、とても貴重な経験をさせて頂きました。ICCEES で出会ったと方々の縁を大事にしながら、5年後は自分が発表者として参加していただきたいと思っています。最後になりましたが、この場をかりて国際中欧・東欧研究協議会の皆様に、心よりお礼を申し上げます。



研究者ボランティアの活躍